

ボランティアサークル「YY会」(非公認サークル)での活動を通して

子ども発達学部心理臨床学科3年 本杉欣也(もとすぎ きんや) 静岡県・藤枝東高校出身

「YY会」は、月に一度、障害のある小中学生の子ども達と一緒に遊んだり、お出かけしたりする活動をしています。行き先も様々で、名古屋港水族館や名古屋市科学館といった施設から、海に行ったり自然の中で遊んだりすることもあります。もちろん、大学のキャンパスを利用してクリスマス会やスタンプラリー等のレクリエーションを行ったりもします。このような場所や行くことを決めたりするミーティングを月に2回、実践がある週の前後の週に行っています。事前のミーティングでは、どの子どもと一緒に行動するのかといったことや、行き先で注意することなどをみんなで話し合います。なかでも特に重点を置いているのは、当たり前ですが、子ども一人ひとりの性格や障害の特性についてです。「YY会」は、将来は障害児(者)に関わる仕事をしたいと思っている学生が多くいます。しかし、活動に初めて参加する場合、どう接していいかわからないといったこともあります。そんな時は、経験豊富な学生が丁寧に教えてくれます。ここ

が「YY会」の良いところで、一方的に教えるのではなく、先輩も後輩も関係なく、メンバーみんなで話し合い、調べ合い、学び合うことができます。実際に事後ミーティングでは、「こんなことがあったけど、どうすればいいかな」といったことを皆で考えます。

私は、将来特別支援学校の教員を目指しているのですが、子ども一人ひとりが持つ障害ゆえの困難さに、どう寄り添い、何がベストなのかということ、サークルの中で実践的に学んでいます。

このように真面目に子どものことを考えていますが、実践ではふざけあったり、全力で遊んだりしているため、笑顔が絶えません。

サークルでは、楽しみながら学ぶことを大切にしています。



わたしたちの先生を紹介します

子ども発達学部心理臨床学科心理臨床専修2年 颯田優季(さつた ゆうき) 愛知県・西尾高校出身

根来 民子(ねごろ たみこ) 心理臨床学科教授

根来先生は、小児科の専門医で、名古屋大学医学部附属病院小児科などを経て、本学の子ども発達学部にて専任教授として赴任されました。大学の外では、岡崎市の社会福祉審議会児童専門部会委員長なども務めてこられました。

私が先生と出会ったのは、1年前期のゼミ(総合演習I)の担当の先生としてでした。まだ大学に慣れていない状態だったので、ゼミの人達と仲良くなれるように、様々な取り組みをして下さいました。バスケットボールやドッジボール、クレープ作り、海岸掃除など、非常に楽しい時を過ごすことができました。根来ゼミがあったからこそ仲良くなった人達がたくさんいます。先生のおかげです。先生は学生のために一生懸命になって下さる先生です。

先生のモットーは、「時は金なり→時間厳守」、「拙速を尊ぶ→期限厳守」、「明日は明日の風が吹く」、「好きこそ物の上手なれ」です。先生が嫌いなことは、「優柔不断」、「うそ、いいわけ」、「講義中の私語」です。

医師であることから、期限を大切に、うそを嫌いとする先生です。

子ども発達学部子ども発達学科保育専修4年 佐藤貴博(さとう たかひろ) 岐阜県・大垣西高校出身、同専修4年 本多なみ(ほんだ なみ) 愛知県・緑高校出身

赤石憲昭(あかいしのりあき) 子ども発達学科准教授

赤石先生の専門は哲学で、「承認論」を大きなテーマにしてゼミが行われています。哲学と聞くと、とても難しいイ



メージを持たれるかもしれませんが、ゼミの中で哲学の話がされることはほとんどありません。みんなそれぞれ、自分の興味・関心に基づいて好きな研究をしているのですが、最後にはなぜか「承認」の問題とつながってくるので不思議です。最初は、哲学、承認がどんなふう子どもに関わる上で生きてくるのか不安な部分もありましたが、今では、人と関わっているという点で承認の重要性を実感しています。先生に言わせれば、「哲学は、人間を根本的に考察するものであり、人間について突き詰めて考えていけば必ず承認の問題とも関係してくる」のだそうです。

赤石先生は、本の読み方や文章の書き方など、基本的な所からしっかり教えてくれるのでとても役立ちます。また、学生各々の関心分野に関係のありそうな文献や講演会を紹介して下さいたり、先生自身もそれらの文献を読んだりして、共に学びを深めてくれます。昨年度は生徒の発案したアトム共同保育所の見学について計画や引率を行って下さり、見学を実現することができました。先生はこのように生徒の学びを全力でサポートして下さいる先生です。

赤石先生は、動物にたとえるとコアラです。温厚な感じで、見ていてすごく和みます。発表などで気がはっているときも、先生を見るとリラックスできて、時には助け船も出してくれるので発表しやすいし、多くの学びや、自身が気づけなかったことも気づけることがあります。そしてゼミによくお菓子を持ってきてくれます。個人的にも本が大好きで、哲学を中心に人生に関わるような分野まで研究室には本がと

てもたくさんあり、プチ図書館みたいな研究室になっています。



2014年度オープンキャンパス障害児心理専修の企画の一場面

この号の主な内容

- 希望する進路と取り組み 心理臨床学科所属学生 1
- 教職インターンシップで学んだこと「魚食の会」と「ふくしの坂」 2
- ゼミで出会った新しい仲間とともに 幼い頃からの保育士の夢 留学生だより 3
- 非公認サークル「YY会」の活動 わたしたちの先生を紹介します 4



第13号 2014年11月15日発行

希望する進路とそれに向けての取り組み 心理臨床学科所属学生

子ども発達学部心理臨床学科3年 宮下藍子(みやした あいこ) 長野県・飯田風越高校出身

「特別支援学校教諭」を目指しています。私の日常を、大学での講義・サークル活動・自主学習の3点に分けて振り返ってみます。

まずは大学での講義です。3年生になり、より専門的な学習が始まりました。私は障害児教育関連の講義の中でも「知的障害児指導法」の「模擬授業」が自分を大きく成長させてくれたと感じています。9人のメンバーと協力し、一つの授業を作りました。授業づくりは初めてで苦戦し、時には終電、休日も家に集まることも。これまでに受講した講義で得た知識やボランティアの経験をフル活用させ、授業づくりの基礎や仲間と協力することなど、多くの学びがあったと感じています。

次にサークルです。私の所属するボランティアサークルでは小学生から高校生までの知的障害児・自閉症児を対象に、水族館や動物園または大学でのレクリエーション活動を行っています。経験を積み重ねるとともに、子どもと一緒に楽しくしています。

最後は自主学習についてです。教員採用試験まで一年を切ったので、最低1日2時間は勉強をしています。特に基礎免許である中学社会科・高校公民科の勉強に力を入れています。また図書館へ行く時、必ずと言っていいほどゼミ生に会えるので、互いに切磋琢磨してモチベーションを高め合っています。

そのほかにもアルバイトでは苦手な「細かい作業」「接客」に挑む、体力をつけるためにランニングする、日本全国を旅する等、自分を変えようと様々

なことに挑戦しています。すべての行動が自己形成につながると感じているので、これからもたくさんの経験を積み重ねて「引き出しの多い人」になりたいです。そこには必ず友人、恩師、家族など「誰か」の存在があります。感謝を忘れず、夢を必ず実現させたいです。

子ども発達学部心理臨床学科4年 山根歩美(やまね あゆみ) 三重県・皇學館高校出身



企業就職を考え始めたのは大学2年生の頃です。入学当初は、保育士になったのですが、飲食店でアルバイトを続けていく内に、お客様を喜ばせるような商売をやりたいと思うようになり、企業就活に切り替えました。

就職活動に本腰を入れたのは、大学3年生の夏休みからです。就職活動に対しての不安も多くあったため、先生方にも相談をしたりしました。少しずつ友達が動き始める時期には、名古屋で行われる就職活動のセミナーにも積極的に足を運び、意識を高めていきました。その頃、どのような会社で働きたいか考えた時、やはり人に笑顔で喜んでもらえる仕事がしたいと考え、プライダル関係の会社を多く受けました。12月から本格的に就職活動が始まり、大変なことや辛いことも沢山ありましたが、両親や友達に励ましてもらいながら意欲的に取り組みました。その結果、私が希望していたプライダルジュエリーの会社に内定を頂く事が出来ました。内定を頂いた時には、両親や友達もとても喜んでくれて嬉しかったです。4月からは大学生活で学んだことを活かし、一生懸命働いていきたいと思っています。



教職インターンシップで学んだこと

心理臨床学科障害児心理専修2年 亀山健太（かめやま けんた） 愛知県・御津高校出身



現在、「教職インターンシップ」に取り組んでいます。教職インターンシップは、各自指定の学校へ行き、先生方の授業や、それ以外の業務を間近に見学、体験することのできる機会です。私は中学校の特別支援学級に配属されている先生と主に行動を共にしました。具体的な活動内容は、自分の配属されたクラスで、午後の授業支援や授業後の部活動、その他業務のお手伝いなどです。特に授業内での支援は学校の授業に直接参加しているわけですから、緊張を隠し切れませんでした。これまで半年間、このインターンシップによって沢山のことを学びました。生徒との日頃からのコミュニケーションの大切さ、普段何気なく受けていた授業に隠されている先生方の苦勞と生徒のための工夫、また先生の教えること一つひとつに対する生徒たちの反応。どれもインターンシップを経験しないと知ることのできなかった大切なことです。私は教師という立場でもない、はたまた生徒という立場でもない、どちらともいえない存在として、時に生徒側に立ち、この授業から学ぶことのできることを自分なりに考え、時に教師の立場になり、先生方の授業の意図について、同じ学校に通う他のインターンシップ生と共に考えました。教師でもない、教育実習生でもないため生徒に教えることはできませんが、学ぶことは山のようにあると知ることができました。将来、特別支援学校の教師を目指す身として、この体験は大変貴重なものとなります。このような体験をさせていただいたことに、感謝いたします。今後のインターンシップも、教師を目指す一人の人間として、先生方からも、生徒たちからも、沢山のことを学んでいきたいです。

「魚食の会」と「ふくしの坂」

心理臨床学科4年 北山恕人（きたやま ゆきと） 山口県・大津高校出身

日本福祉大学ならではのトピックを2つ紹介したいと思います。1つは地域の方と密着していて、交流する機会が数多くあります。中でも私が印象深いことは伊勢湾でとれた魚を地元の漁師の方と調理をして食べるという「魚食の会」を行っています。大学生になり、自炊をしている私たちですが、魚をさばいたり、たこのぬめりをとったり、初めての体験ばかりで貴重な体験をさせていただきました。また、漁師の方と一緒に調理をするので漁業の素晴らしい体験や苦勞話なども聞けます。地元でとれた新鮮な魚を自分たちで調理して食べるとより一層おいしさが増します。ぜひ、次の機会にお腹も心も満たされる「魚食の会」へ参加してみてはどうでしょうか。

もう1つは「ふくしの坂」についてです。日本福祉大学は名鉄知多奥田駅という駅から降りてすぐのところにあります。その途中に長い長い「ゆりのき坂」という坂があります。日本福祉大学生はその坂の上り降りを繰り返し、毎日大学に通っています。電車通学の人は雨の日も炎天下の日もあの坂を通らなくてはなりません。電車を毎日利用する友達に聞くと、とても疲れると

子ども発達学部子ども発達学科学校教育専修2年 藤田凌平（ふじた りょうへい）静岡県・榛原高校出身

現在、教職インターンシップで美浜町立野間中学校に行っています。毎週木曜日の5時間目から、通常学級または特別支援学級の授業に参加しています。また部活動にも参加し、非常に貴重な体験をさせていただいています。

通常学級では主に総合的学習の時間が多く、今まで2年生の郡上八幡研修での出し物のサポートや野間中祭、体育祭などの話し合いにも参加しました。また教科の授業に参加した時もあり、机間指導などを通して授業の様子を学ぶことができました。多くのクラスを回ることで、クラス一つひとつの雰囲気の違いがあることを見つけ、そのクラスにあった指導や対応が必要であるということ学びました。またこの時期ならではの「思春期」の生徒たちと関わる中で、コミュニケーションの難しさや心を開いてくれた時の喜びを感じることができました。

特別支援学級では、「生活単元学習」として様々な事を生徒たちと一緒に学びました。授業補助という形ではありましたが、バドミントンなどの運動や調理実習などをしました。特別支援学級は少人数のため一人ひとりと関わる時間が多く、生徒たちとの距離感を近く感じました。ここでは特に教師の対応という面で学ぶことが多かったです。生徒が授業中に立ち上がってしまうことや、どこかに行ってしまうとすぐ怒るのではなく、近くに寄り添い話を聞きながら対応をしていました。このような「技術」が教師には必要だということ学びました。

その他にも、海岸清掃や学年集会、部活動・行事への参加など本当に多くの貴重な経験ができました。今まで子どもの目線で見れていたことが、教師の目線から見ることの大切さを学ぶことができました。また環境整備や校内整備を通して学校の、教師の裏の仕事を体験することで、より教師の仕事の大変さを学びました。

このインターンシップを通して多くの課題を見つけました。生徒との距離感や子どもの目には見えない学校の仕事はもちろん、仲間同士の情報交換や意見の出し合いも非常に大切だと学びました。自らの「積極性」をこれから高めていきたいと思えます。最後に担当の先生から「子どものタイミングを見逃してはいけない」というアドバイスをいただきました。子どもと関わる中で大切にしていきたい私の課題です。



いいです。また、車いすや足が不自由な人でも一生懸命に上っています。なぜ、日本福祉大学をつくられた方はその長い坂を作られたのでしょうか。福祉を専門とする大学ならバリアフリーを取り入れるべきだったのではないかと考える方もいると思いますが、私は、あえてこの坂をつくったのではないかと考えます。この坂は「ふくしの坂」ではないかと思えます。どのような天候であってもこの坂を通して大学に行かなければならない。講義を受けるためにはあの長い坂を通して大学に行くことで、知識だけでなく、長い坂を通ることで「根性」「忍耐」や「助け合い」が自然と身につくのではないのでしょうか。ゆえに、私たちの先輩方は社会に出て多大な活躍をされているのだと思います。そのような先輩方を誇りに思えます。現役の学生も先輩方に負けないように「ふくしの坂」を上って勉学もサークル活動を頑張ってください。

ゼミで出会った新しい仲間たちとともに

子ども発達学科学校教育専修1年 伊東裕美（いとう ゆみ） 富山県・入善高校出身

前期、後期ともに山口正ゼミです。前期は、入学して間もなく、また、県外から集まったメンバーが揃ったということもあり、初めはよそよそしく、みんなが期待と不安を持って始まりました。しかし、毎年春に行われる、学部の新入生セミナーというゼミ対抗レクリエーション大会において、全員で協力し合い、ひとつの競技で優勝することができました。それ以来、ゼミ内の雰囲気はとても良く、お互いに挨拶も増え、話し合いをするときも多くの意見が出るようになり、とても明るいゼミとなりました。また、課外学習として、みんなで計画を立て、内海の家へ行きました。そこでは、全員でお昼ごはんを共にし、スイカ割り、ちょっとしたゲームや海岸での自由時間などを楽しみました。また、地域の方々のあたたかさに触れるなど、仲間たちとの親睦を深めることのできる、価値あるゼミ活動になりました。

後期になり、メンバーは大きく替わりました。新しい山口正ゼミとしての再出発です。後期ゼミには新入生セミナーのような大きなイベントはありません。そのため、早いうちから仲良くなれるとは思いませんでした。しかし、先生の企画・運営のもと、お茶会や球技大会を行い、すぐに打ち解けあうことができました。また、個人一人ひとりが、前期ゼミで培った学びや個性などを十分に発揮し、話を聞く姿勢や、出された課題に取り組む姿勢など、学習面での協調性もあるように感じます。現在みんなで行っている文献学習の様子を見てみると、まさにその通りです。ゼミ全体が、自分の将来を見つめ、福祉に対しての学びたいという強い思いが広まり、とても良い雰囲気となっています。

ゼミ活動を通して、自分の将来について向き合い、1年生である今の私に何ができるかということ深く考えるようになりました。ゼミで出会った新しい仲間たちと共に学び、時には遊び、楽しい時間を過ごすというのも大学生の醍醐味でもあるのではない



留学生だより

心理臨床学科4年 趙榮妍（じょ よんよん）韓国出身

2011年に韓国人の留学生として入学しました。日本での留学を決めた理由は、日本語を学ぶことが好きだったからです。心理学を学べる大学を探していた中で、日本福祉大学を選んだ理由は、子ども発達学部の中に心理臨床学科があるということに魅力を感じて選ぶことになりました。昔から子どもの心理や問題に興味があり、福祉の観点からでも学ぶことができると思いました。

合格通知をもらった日からは、日本での生活について悩み始めました。日本語で授業を聞くのはあまり慣れていなかったもので、心配でした。しかし、実際大学に入り、授業を受けてみると、いつも隣の友達や先生たちに助けられました。授業での困難なことから試験まで、相談させてもらいました。

他に、心配したところは日本の大学になじめるかということでした。入学してから学生寮で生活しましたが、皆さん本当にやさしくしてもらい、そんな心配をした自分がおろかに感じれるほどで

幼い頃からの保育士の夢

子ども発達学科保育専修3年 温水すみれ（ぬくみず すみれ）鹿児島県・鹿児島純心女子高校出身

幼いころからの「保育士になる」という夢を実現するため日本福祉大学へ入学し、はや3年がたちました。1年次で保育の基礎を学び、2年次では、より専門分野を学び保育所での実習を行いました。3年になり保育技術を学び先日施設での実習を終えました。私は、難聴を持っているため子どもの声や話を全て聞き取ることが難しいです。今まで保育園などで、ボランティアとして子どもたちと関わってきたのですが、まだ言葉のやり取りのできない乳児クラスの子もたちとばかり関わってしま



った。保育園実習では幼児クラスの実習ということでとても不安でしたが、子どもたちに伝わりやすい言葉で耳が聞こえにくいことや、ゆっくり話してくれたら分かる事を伝えると、ゆっくり話しかけてくれたり身振りをつけながら話しかけてくれました。子どもは素直であり、きちんと理解してくれているのだなととても嬉しくなると同時に、自分の行動次第で変わっていくことを実感することができました。保育所・施設での実習を通し、子どもたちと関わる中で子どもの気持ちを考え共感し、関わることの大切さを実感しました。それとともに耳からの情報がない分、他の人の2倍の気持ちを持ち察していくことが必要になると気づくことができました。

実習を終え、子どもたちと身近で接する職業の魅力を改めて感じました。座学では学べない実践的な部分や保育者としての在り方などたくさん学ぶことができました。実習で経験し学んだことを忘れず保育者として実践の場で生かせるよう頑張りたいと思います。

将来、保育士として虐待や家庭の事情などのため乳児院で生活する0歳から2歳までの子どもたちの心のケアや生活していく上での支援をしていきたいと考えています。講義の中で、乳幼児期の愛着関係は、大人になった時に他人を愛することが出来るようになるためにとても大切な関わりだと学びました。この愛着関係が1番大切な時期の子どもたち一人ひとりにしっかりと愛情を注ぎ関わっていける保育士になりたいと思います。また、子どもたちに対してだけではなく、家庭への支援も出来る保育士になりたいと思います。子どもとその家族の最善の支援を考えていけるようにしたいです。幼いころからの「保育士になる」という夢を実現できるよう、残り少ない大学生活の中で積極的にボランティアなどに参加し子どもと関わったり、日々の勉強を積み重ねていきたいと思っています。



した。私が下手な日本語で喋っていても、最後まで聞いてくれたり、知らないことはやさしく教えてくれました。学部・学科の中でも一人しかいない留学生である私を受け入れてくれるかと心配しましたが、授業のクラスやグループで出会った人々は私を韓国から来た留学生としてではなく、一人の学生として接してくれたのが本当にありがたかったです。

最後に、日本福祉大学を選んだことには後悔はありません。皆、福祉を学ぶ人たちだからか、本当に優しいです。そして、自分もその優しさを学びました。留学生として日本を勉強したということもありますが、人として持つべき優しさや人々を育む福祉の心を学んだと思います。